

「フェミニスト政治経済論から見た『分断』」

三浦まり 氏（委員）

■暗黙の道德指標による生きづらさ

現在の日本は政党が非常に弱体化し、国家・国民が分離するような状況であり、そこにポピュリスト的な政治が巣食うような状況ができています。この関係性をもう一度作り直そうと考えるとき、政治学の立場からすると、これまでのご提起にあった横の分断における関係性と同時に、縦の分断をつなぎ直す存在、政治学で市民といわれている「主体性を持った市民」をどう発見し、育成していくのかという課題もあると思います。

そもそも「分断」という言葉を捉え返してみると、理想的なあり方として、国民、国家を単位とする社会的連帯があるべきだと思うからこそ、今の状況が問題だと捉えているのだと思います。同時に、理想的なあり方で示した「社会的連帯」とは同等で自立した市民を暗黙の了解としているという気がします。そもそも市民は平等ではなく、女性や移民、戦後の福祉国家の中にはさまざまな序列が法的にではなく、道徳的に政治的に作られてきました。そして、暗黙の道德指標で生み出されてきた排除という矛盾を見ないようにしてきました。その結果、制度の谷間に落ち込んでしまった困窮層だけでなく、道德指標によって序列され困難を抱える人たちの間にも生きづらさが広がり、社会的に顕在化しつつあります。

■資本主義と境界線闘争

境界線闘争は階級闘争と同じくらい重要です。フェミニズム経済学での議論を簡単に振り返りますと、今まで社会の中に埋め込まれていた経済が資本主義の発展と共に分離していき、外部化された領域の多くに女性が割り当てられ、その多くが無償のケア労働になっています。この境界線をどう引き直すのか、境界線闘争が資本主義の中で歴史的に常に変遷しています。それが、女性のドメスティシティであるとか、イデオロギー的に正当化されることによって、社会的にも受容されてきました。資本主義は、こうした収奪を内在化し、より効率的に資本蓄積ができるようにしてきました。しかし、環境問題と同じで、どちらも収奪しすぎれば枯渇します。

それをどう食い止めるのか、フェミニスト脱成長学派では、これまでの貨幣的な福祉国家を手直ししつつ、今までの境界線闘争ではブラインドスポットになっていたボランティアや無償ケア労働を、どのようにすれば公共のものにできるのかという議論がされています。

■新自由主義とフェミニズム

日本が新自由主義になっているのは自明のことです。本来、新自由主義的な発想やマインドが入るべきではない、公共セクターにも企業統治モデルが侵食してきています。統治性の観点

からすると、新自由主義的なあり方とは個々人が深く内面化し、主体性を発揮することです。「人としての主体性の発揮」は近年フェミニズムが求めてきたあり方であり、フェミニズムには新自由主義と共振しやすい点があります。

その結果、資本主義のメカニズムの中で社会的生産を維持するためにもフェミニズムは利用されています。例えば英米では、幸せでワークライフバランスが達成できている女性を、新たな女性像として称揚し、新自由主義的な母性が高まっています。また、生産領域では、グローバル資本の企業で成功している女性が、フェミニズムの言葉を借りながら語るというフェミニズム利用があります。この状況にはフェミニズムの側を含め、様々な批判があります。また、グローバル資本の側が盛んに行っている多様性戦略に対して右から左からバックラッシュが起り、フェミニストたちはその状況にも担ぎだされ、左右からの挟撃に合っている状況です。

しかし、新自由主義的統治性、主体性の発揮は、近代のあり方として重要です。個人に還元するだけではなく、社会に再び埋め込んでいくようなものでなくてはならないと思います。

■ケア論からみた人と人との関係性

このような状況から社会をどう立て直していくのかを、ケア論からみていきたいと思います。これからは、社会の資源をどう配分するのかという社会保障論と、人と人との関係をどう繋いでいくかというケア論のズレを意識しながら、統合的なものを打ち立てていく必要があります。人は生まれながらに脆弱性を抱え、相互に依存し合っているにも関わらず、今まで自立した男性を標準として社会を設計してきました。しかし、脆弱で誰もが誰かのケアに依存しながら生きながらえているという本質に根差した人間のモデルで再設計しないことには、今の枯渇状況は解決できないでしょう。さらにケア論では、資源配分をどう変えるかだけでなく、関係性をコアに置くべきだということが示唆されています。

似たような話がフェミニスト制度論という形で、政治学でも展開されます。政治学は、公的な権力関係を分析する学問ですが、公的な権力関係だけを論じていても分からないことが多くあります。家庭内の男女関係においても地域社会においても、インフォーマルなところでの権力作用にもっと注目をしていく必要があると思います。

話をケア論に戻すと、キャサリン・リンチの『ケアとキャピタリズム』という本があります。そこでは、今後我々が考えるべき正義とは何かが語られ、「分配の正義」「承認の正義」「代表の正義」「関係の正義」の4つを同時に追求していくようなかたちで社会モデルを打ち出すべきだとしています。この話の中核にあるのは、近しい人たちが愛情としておこなっているケア。この愛情がケアワークや資本にもあるべきではないかと話しています。

豊かな愛情に満ちた関係性を私たちは育めるだろうか。そのコアになるのは、愛情をどう考えるかだと思います。同時に、依存の関係が発生すると簡単に暴力や虐待、支配が起きます。それらを防ぎながら、必要とされるニーズを充足するような関係性は難しいところだと思いますが、そこをどうつくるのかを課題にしていきたいです。

最後に、私自身、日本社会の変化の兆しは色々なところにあると感じています。例えばIターンをした人のなかには、脱成長を地でいく人達があります。日本のメインストリームにはならないかもしれませんが、そういう人たちの中から女性議員も誕生していて、地方の地域に新し

い風を起こしています。

(文責：全労済協会)